

目次

71	65	56	48	40	27	15	7
タカイタカイオババ	成人の日ゝみんなお婆さんになるよゝ	傷つきました	世の中に人の来るこそうるさけれ　　とはいふもののお前ではなし	「ありがとう」の呪い	へい拓ちゃん	渋谷、泣き上戸	言葉

147	140	132	122	116	110	104	98	92	85	78
liberté	言葉は歌なり歌は言葉なり	復讐	黒人好きならエロい歌歌えばいい	自慢じゃないけど	ちゃっかしいの謎	声は小さい、気は強い	積み木の塔	慰めの技術について	しつこいナンパ	後遺症

219	209	203	196	190	184	178	172	165	159	153
「呪い」と誰かが口にする	わたしはわたし	無口な客	スーパークレー屋	地頭が良い	同じ名前	愛しの津軽	絶句	あんたみたいな	くさい	アイゴヤ

ブックデザイン 戸塚泰雄 (m)

撮影 根本真裕美

言葉

はじめて名刺を持つにあたって、肩書きはどうしようかと考えなければならなかった。

作家、と名乗るのはおこがましい。エッセイストというのも、今後エッセイ以外にも書くかもしれないし、コラムニストというのと、自分のなかではなんだか明快にズバズバと書いていくようなイメージがあって、グズグズした私の文章はそれではないと思った。今のところ、起きたことを文字に残していつているのだから、記録係というのはどうだろう？ いや、斜に構えすぎか。書記、書き手、洒落臭しゃらくさいな。シャワー

で頭を洗いながら考えて、髪を乾かし終わる頃、文筆家、とすることにした。私としてはなかなかそつがない肩書きに落ち着いたと満足していたのだが、いざ名刺を配り始めてみると、受け取った何人かが「文筆家」を「文豪家」と読み違えて、私は自称文豪の思い上がりも甚だしい女になってしまったのだった。

「ハーフが極端な『日本らしさ』に執着してしまうのはそう珍しいことではない」という話を聞いたのはごく最近のことである。それを聞いた私は、自分の重要なアイデンティティの一部が雷に打たれて崩れ落ちるような感覚を覚えた。そんな風変わりな人間は、この世界に私だけだろう、と置いていたからだ。両親からふたつのルーツを授かるということは、そのどちらも自分だと認めるということで、私が会ってきた私以外のハーフは、なんの疑いもなくそれができているように見えた。モデルの世界を端から眺めていると特にそう感じる。

特性を愛して、最大限に生かす。それが「人より多くを与えられた者」の正しい姿である、彼女たちはインスタグラムの華やかなパーティーの写真の向こうから私に訴えかける。私は自分が半分外国人であることを、小さい頃から頑^{かたく}なに拒絶していた。多くを持って特別な存在になるよりも、なんの変哲もない人間として好かれることが望みだった。そのために「日本人らしい」丁寧な所作だの、話し方だのと、自分で作った足場を一生懸命積み上げて背の高さを揃えようと努めた。もったいないと言われるのも大きなお世話だと思いつつ、こんな偏屈なことをしているのは私だけだろうと、どこか誇らしい気持ちで生きてきた。しかし、そうではなかったのだ。あるハーフは子供時代にガイジンといじめられた末、心を守るために自らも「ガイジン嫌い」を演じるようになり、またある者は右翼団体に感化され、そして私は、そのありがちな捻^{ひね}くれのひとつとして日本語にしがみついたに過ぎないようだった。

それでも、私は日本語が好きだった。椎名林檎の歌が好きで、谷川俊太郎の「信じ

る」が好きで、男の人がふと漏らす「あら」の響きが好きだった。日本語は美しいと、感じる事ができる自分が好きだった。

あるとき、新宿で終電を逃して、当時の上司からタクシー代を貰^{もら}って横浜まで帰った。酔っていた私は運転手に住所を伝えたあと、高速道路から見える暗い海を眺めているうちにそのまま眠ってしまった。声を掛けられて目を覚ますと、そこは家の近くの公園だった。そのまま走れば5分と経たずに到着するのだが、山の中の入り組んだ道が複雑で迷ってしまったようだ。

「こっからどうしますかね」

「この先を左に曲がって、そうすると坂があるので、そちらを下っていただいだけ

ますか」

呂律^{ろれつ}が回らないなりに、丁寧に伝えたと思う。

「え？ ごめんわからない」

「この先真っ直ぐ行くと突き当たりがあるので、曲がってください。そこからまたお伝えするので」

「は？ 聞こえない」

「だから」

「なに言ってるかわかんねえんだよ、ガイジンだから」

言われた。ついに言われてしまった。

私の言い方が悪かったのだろうか。なにか氣に障^{さわ}ってしまったのだろうか。お酒でぼーっとしていた頭の血が、一気に引いていくのがわかった。心臓がシンバルのように激しく鳴る。声の震えを抑えようとしたせいで喉が開いて、泣きそうな低い声でやっとなんとか、絞り出した。

「私の言ってること、わかりますか」

丁寧に話そうとしすぎるのは私の悪い癖だ。友達同士のお喋^{しやべ}りでも、私が言葉を選びきれないままモタモタと喋るせいで、それまで温まっていた空気が少し冷えてしま

う。私はときどき、いたたまれない気持ちになったが、誰にだって私がそのとき感じていることを桐箱の蓋のように、ぴったりと知ってほしかった。今だって、ただ「真っ直ぐ進んで」とだけ言えば、少々感じは悪くてもはっきり通じたのかもしれない。私が小さい声でまどろっこしく話したのが、きつとこの人の癪に障ってしまったのだ。丁寧な人間だと思われない。日本語が下手だと思われない。この国の仲間だと認めてほしい。そんな、他人から見ればあまりに瑣末なプライドは人を苛立たせ、結局は自分の急所に思いきり突き刺さった。こんなことなら、言葉の真意なんて知らうとしなければよかったのだろうか。好きにならなければよかったのか。惨めだったらしく縫りついて、最後に脚で蹴飛ばされた気分だった。なんだよ。結局余所者かよ。返せよ、お前に使った時間。全部。

言葉はただのツールのはずだ。それなのに、どうしてこんなにも美しいのだろう。

私の言ってること、わかりますか。今、どれだけの人が私の言葉を抱き留めてくれるだろう。この世界が真っ暗闇になって、お互いの姿形がわからなくなったとしても、私が選んで口に出した言葉で私だって気づいてくれる人が、一体どれだけのものだろう。言葉たちへの恋心に混じってしまった数滴の薄暗い疎ましき。血は今日も心臓を巡り続けて、私は言葉を書いている。もっと知りたい。こんなとき、貴方になんと言えようか。もっと聞きたい。貴方はなんて言ってくれるのか。

この身体には美しい言葉たちが巻きついて、私はもう、どこへだって逃げられないのだ。